ヘーベルの暦ばなしの世界

西　脇　　宏

I

ヨーハン・ペーター・ヘーベル (Johann Peter Hebel, 1760—1826) には，総計300篇近い「暦ばなし」(》Kalendergeschichte《) がある。それらは主として1803年から1819年に亘る15年余りの間に書かれたもので，その大部分はバーデン地方の「国暦」(》Landkalender《) に掲載された。『バーデン 選帝侯のいとも尊き特許を受けたるバーデン辺境伯領ルター派住民のための国暦』(》Curfürstlich badischer gnädigst privilegirter Landkalender für die badische Marggravschaft lutherischen Antheils《) という，辺境伯領ルター派住民以外の者には，「『私を買うな，私はお前には何の関りもない』という人のいい警告[1]」に他ならぬ事々しい名前を持つその暦は，ヘーベルの提案により，1808年版より『ライン地方の家の友』(》Der Rheinländische Hausfreund《) と名称を変更し，内容体裁も一新された。ヘーベルは1808年版から1815年版までの8年間と1819年版の単独責任者として，その暦の編集に携わったのであった。

ヘーベルの暦ばなしは，それらが掲載された暦が持つ紙数の制限上，飛び抜けて長大な作品は存在しないという形態上の共通点を除けば，その主題も素材も極めて多岐にわたっている。笑話や教訓話，物語性豊かに語られる逸話，伝記，事件の報告等の本来の読みものと並んで，自然科学[2] や統計学[3]，あるいは生活実用上[4] の知識の伝達を目的とする作品群が存在する。厳密に言えば「暦ばなし」は前者にのみ使われるべき名称であって，後者の諸篇はむしろ

---

1) 》Unabgefordertes Gutachten über eine vorteilhaftere Einrichtung des Calenders《. Johann Peter Hebel: *Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes——Kritische Gesamtausgabe mit den Kalender-Holzschnitten,* hrsg. v. Winfried Theis, Stuttgart (Reclam) 1981, S. 418 より引用。強調は原著者。

2) 》Allgemeine Betrachtung über das Weltgebäude《 を始めとする天文学や 》Von den Schlangen《 等の動物誌。

3) 》Was in einer großen Stadt draufgeht《 等。

4) 》Des Adjunkts Standrede über das neue Maß und Gewicht《, 》Rote Dinte zu machen《 等。

「暦記事」(》Kalenderartikel《) と呼ばれるのがふさわしいであろう。ヘーベル自身『ライン地方の友の家』の副題で,「ためになる情報」と「楽しい物語」というように両者を区別している[5]。またいくつかの全集でもそのような区分が踏襲されている。例えばインゼル版全集では,「物語」(》Erzählungen《) と「雑篇」(》Vermischte Schriften《) という項目が立てられ, 両者が分類整理されている。しかしながらヘーベルの語り手として無類なところは, 知識の伝達という目的に強く拘束された諸篇においても,「家の友」の語り口が自在に発揮されている点にある。ハイデッガーは一連の宇宙の構造についての考察を「詩的」と名附けることをはばからなかったし[6], ベンヤミンは,「宇宙の構造さえも村の家政学へと組み入れてしまう[7]」語り手 ヘーベルの一貫した眼差しを指摘している。

ヘーベルはかつて暦の果すべき役割について,「出来のいい暦は世界の鏡であらねばならない[8]」と述べたことがあった。ここで言われている「世界」とはあくまでも人間の生活空間としての地上世界, 即ち世の中のことである。ヘーベルの暦においては, 世界は何よりもまず,「人と人とのつながりとその関係の絶え間ない再形成として表現[9]」されているのである。以下において「世界」の意味をひとまず「地上世界」に限定し, 狭義における「暦ばなし」を主として考察の対象としながら, ヘーベルの鏡に映った世界の姿をのぞいてみることにする。そしてその世界の鏡像を貫く根本原理について, 私なりに考えてみたい。

---

5) Uli Däster: *Johann Peter Hebel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1973, S. 102 参照。

6) Martin Heidegger: *Hebel——der Hausfreund*, Pfullingen (Neske) 1957. *Zu Johann Peter Hebel*, hrsg. v. Rainer Kawa, Stuttgart (Klett) 1981, S. 46 より引用。

7) Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften II・1*, hrsg. v. Rolf Tiedermann u. Harmann Schweppenhäuser, Werkausgabe Bd. 4, Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1980, S. 277.

8) 》Der preußische Krieg《. Johann Peter Hebel: *Poetische Werke*, Nachw. v. Theodor Salfinger (Winkler Dünndruck Ausg.), München (Winkler) 1978, S. 263.

9) Maria Lypp: 》Der geneigte Leser verstehens《, in *Euphorion* Bd. 64, 1970, S. 385-398. *Zu J. P. Hebel*, S. 101 より引用。

学校の教科書等にも数多く採用され[10]，ヘーベルの暦ばなしの中で最も人口に膾炙しているものの一つである》Kannitverstan《をまず取り上げてみよう[11]。「奇妙な回り道をしてドイツの年若い職人が，アムステルダムで誤りを通じて真理へと，真理の認識へとたどりついた[12]」この話は，私たちにヘーベルの暦ばなしの世界への恰好の案内役を務めてくれるであろう。

アムステルダム，「宏壮な邸が立ち並び，多くの船が揺れ動き，せわしげな人々で満ちあふれたこの大きく豊かな商業都市」に到着したドイツの職人は，故郷のトゥトリンゲンからの旅の途次，ついぞ見かけたことのない「大きく美しい邸」を目にする。「屋根に6基の煙突」を備えたこの「豪勢な建物」を驚嘆して眺めていた彼は，やがて通りすがりの人に尋ねないではいられなくなる。「『教えて下さいませんか，窓にチューリップやエゾギクやアラセイトウをいっぱい飾ったこのすばらしいお邸のご主人は何とおっしゃるのかを。』」いきなりドイツ語で尋ねられた通行人は，一言無愛想に》Kannitverstan《と答える。「これは一つのオランダ語，正確に言えば三つの単語で，ドイツ語に直せば，Ich kann Euch nicht verstehen（私はあなたの言うことがわからない）ほどの意味であった」のだが，「気のいい異国人」はそれが邸の主人の名だと勘違いしてしまう。歩き続けた彼はやがて港へ出る。そこでは，「東インドから着いたばかりで，今ちょうど荷おろしの最中であった一艘の大きな船が彼の注意を引きつけた。」船主の名を尋ねた彼が得た返答は，またしても》Kannitverstan《であった。そこで彼はなるほどと一人得心する。「海がこれほどの富を陸地に打ち寄せてくれる人なら，あれほどの邸を世間へ構え，金色の植木鉢であんなにたくさんのチューリップを窓に飾るのもたやすいことだ」と。誤解をもとに職人の頭の中に作りあげられた Kannitverstan 氏と自分を引き比べて，彼はみじめな気持ちになる。そして自分もいつかは Kannitverstan 氏ほど稼いでみたいものだと思いながら街角をまがると，今度は「大きな葬列」に出会う。若者は「一行が通りすぎるまで，帽子を手に取り，つつましやかに立

---

10) Ludwig Rohner: *Kalendergeschichte und Kalender*, Wiesbaden (Athenaion) 1978, S. 209f. 参照。

11) 》Kannitverstan《が著者会心の作の一つであることは，『ラインの家の友の宝石箱』(》Schatzkästlein des rheinischen Hausfreundes《) の『序文』(》Vorrede《) にもうかがわれる。*Schatzkästlein*, S. 13, *Ibid.*, S. 299 参照。

12) 》Kannitverstan《からの引用は，Johann Peter Hebel: *Werke 1. Bd.*, hrsg. v. Eberhard Meckel, eingeleitet v. Robert Minder, Frankfurt a. M. (Insel) 1968, S. 51-53.

ちつくしていた」が，行列の最後尾の男の外套をつかんで，死者との関係を尋ねずにはおれない。するとまたしても 》Kannitverstan《 と答えが返ってくる。「その時われわれの善良なトゥトリゲンの若者の目からは，大粒の涙がこぼれ，彼の心は一度に重くもなりまた軽くもなったのだった。」地上の富の不平等で彼を暗鬱な気持ちにさせた Kannitverstan 氏に同情を禁じえなくなった彼は，墓地まで葬列について行く。こうして若者は「この世のあらゆるものの移ろいやすさ」という「真理の認識」に到達し，自らの運命に満足することを学ぶ。そして，「世の中にはあんなに大勢の人があんなにも裕福なのに，自分はこんなにも貧しいと，彼の心がまたしても重くなりそうな折には，もっぱらアムステルダムの Kannitverstan 氏のことを，彼の大きな邸と彼の豊かな船，そして彼の狭い墓のことを思い浮かべるのであった。」

》Kannitverstan《 には，さまざまな意味において，ヘーベルの暦話の世界が集約的に示されている。例えば，その悠長な語り口を一例として挙げることができる。》Kannitverstan《 の僅か数ページのテクストには，so や solch 等の話し言葉特有の語句が多用されており，》salveni Mausdreck darunter《 や》ein Stück Limburger Käse《 等の物語の進行とは直接関係のない即物的描写が挿入されている。あるいはまた，冒頭に主題ないしはそれに相当するものを提示し，しかる後に本来の物語を始めるという物語の型においても，》Kannitverstan《 はその他の暦ばなしを代表している。主題を冒頭に置くことにより，いわば物語の「やま」を失った時点から語り始めることになる語り手ヘーベルのあり方を，ベンヤミンは「退却将軍」(》Rückzugsgeneral《) にたとえたことがあった[13]。これらはいずれも語り手としてのヘーベルを考える際には極めて重要な課題であるが，暦ばなしにおける世界の姿の解明を目ざす本稿では割愛せざるをえない。以下において，物語の場としての「都市」，登場人物としての「職人」，物語の主題としての「この世の移ろいやすさ」，この3点に焦点を絞り，その他の暦ばなしと関連づけながら，考察を進めてゆくことにする。

II

ゼークリンゲン・ブラッセンハイム，トゥトリンゲン等の暦の読者に親しみ

13) Walter Benjamin: *Gesammelte Schriften II・3*, S. 1447. Ernst Bloch: Nachwort zu: *Johann Peter Hebel Kalendergeschichten*, ausgewählt u. mit einem Nachw. v. E. B., mit 19 Holzschnitten v. Ludwig Richter, Frankfurt a. M. (Insel) 1965, S. 142 および Rohner, S. 228 参照。

深い田舎町が，ヘーベルの暦ばなしの舞台として，頻度の点で中心的役割を果していることは論を俟つまでもない。しかし同時に，ベンヤミンも指摘しているように，「モスクワやアムステルダム，イェルサレムやミラノがその地平線を形成している[14]」ことも忘れてはならない。「ミラノからコペンハーゲンに至るまでの読者のみなさん[15]」とヘーベルは自らの読者に呼びかけている。このような「公然たるコスモポリタニズム[16]」こそが，偏狭な地方の風土に縛られた凡庸な農民啓蒙家たちとヘーベルを画する一線でもある[17]。》Kannitverstan《のアルステルダムを始めとして，ロンドン（》Merkwürdige Schicksale eines jungen Engländers《，》Der große Schwimmer《等），パリ（》Der Wasserträger《，》Ist der Mensch ein wunderliches Geschöpf《等），ベルリン（》Schlechter Lohn《），ウィーン（》Der silberne Löffel《），モスクワ（》Der Brand von Moskau《）等々，当時のヨーロッパの殆んどすべての大都市が一度は暦ばなしの舞台となっているのである。その他にも都市を舞台とする物語はいくつもある。

ここで》Kannitverstan《に戻って，物語空間として都市の持つ意味を考えてみることにする。》Kannitverstan《の冒頭は次のように始まる。

> Der Mensch hat wohl täglich Gelegenheit, in Emmendingen und Gundelfingen, so gut als in Amsterdam Betrachtungen über den Unbestand aller irdischen Dinge anzustellen, wenn er will, und zufrieden zu werden mit seinem Schicksal, wenn auch nicht viel gebratene Tauben für ihn in der Luft herumfliegen[18].

大都市アムステルダムの対照として持ち出された，エメンディンゲンやグンデルフィンゲンは，暦の読者に身近なライン地方の田舎町である。この叙述だけでは真理認識の場としてのアムステルダムの必然性は浮びあがってはこない。しかし，「地上のあらゆるものの移ろいやすさ」の認識というこの物語の主題にとって，大都市以上にふさわしい場はないであろう。ドイツの若い職人

---

14) Benjamin: *Gesammelte Schriften II·1*, S. 277, Benjamin: *Gesammelte Schriften II·2*, S. 638.
15) 》Einträglicher Rätselhandel《. Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 152.
16) Benjamin: *Gesammelte Schriften II·1*, S. 277.
17) *Schatzkästlein*, S. 466 参照。
18) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 51.

の認識は誤解によるものであったが，都市こそは日常的には隠蔽されているはずのこの世の移ろいやすさ，現世のはかなさを，まさに日常として，常態として体現している場に他ならないからである。都市は何よりも地上の富が集中する場所である。トゥトリンゲンの若者の目を奪った宏壮な邸や積荷を満載した船はいずれも都市の豊かさの象徴である。しかしながら，富，財産の都市の住民に対する帰属関係は，畑地の農民に対するそれほど永続的なものではない。パリの水汲人夫のような主体的選択の結果でなくとも，昨日の大金持ちが人夫に零落することや，またその逆も大都会では日常的に起りうるのだ。さればこそ都市の富を求めて多くの人々が，自分を拘束する土地から自由となって都市に流入するのである。ドイツの若い職人の旅の目的は述べられてはいないが，彼もまたそうした人々の一人であろう。都市とはそのような本来の意味での家を失った人々のすみかなのである。

そして，アムステルダムがいみじくも「商業都市」(》Handelsstadt《) であるように，都市の繁栄は何よりも「取り引き」(》Handel《) によってもたらされているのである。そのような都市の機能をより根源的な形で示している場としては，「市」(》Markt《) や，定期的に市の立つ場である「広場」(》Marktplatz《) がある。取り引きを描かせてはドイツの作家で右に出るものはいないと言われる[19] ヘーベルにとって，それらもまた物語の重要な舞台となっている (》Der betrogene Krämer《, 》Zwei honette Kaufleute《 等)。

さらに，都市や市と並んで，それらとは比較にならない位しばしば物語の舞台として登場するのは「居酒屋」(》Wirtshaus《) である。また居酒屋は狭義の暦ばなしばかりでなく，本来「暦記事」に分類されるべき諸篇においても重要な役割を果している (例えば，》Allgemeine Betrachtung über das Weltgebäude《 や 》Des Adjunkts Standrede über das neue Maß und Gewicht《 等)。都市や市では取り引きが行われ，品物や金銭が交換される。そのためにさまざまな国からさまざまな人たちが集まる。それと同じように居酒屋も，さまざまな人たちの集う場であるが，ただしそこで交換されるのは，うわさや異国の出来事等の各種の情報，つまりはことばなのである。

例えばウィーンの「赤牛亭」の様子をヘーベルは，巧みな自己引用を交えて以下のように描写している。

Da [im 》Roten Ochsen《] waren bekannte und unbekannte Menschen,

19) Benjamin: *Gesammelte Schriften II・1*, S. 279.

Vornehme und Mittelmäßige, ehrliche Leute und Spitzbuben, wie überall. Man aß und trank, der eine viel, der andere wenig. Man sprach und disputierte von dem und jenem, zum Exempel von dem Steinregen bei Stannern in Mähren, von dem Machin in Frankreich, der mit dem großen Wolf gekämpft hat[20].

都市，市，居酒屋，この三つは単独で出てくるばかりではなく，時には組み合わされて物語の舞台となる。》Den Zahnarzt《で詐欺の舞台となるのは年の市（Jahrmarkt）が立っている村の居酒屋であるし，ミラノの阿呆が自分の家を売りに出すのは，「人でにぎわい，さかんな取り引きが行われている大きな広場（Marktplatz)[21]」なのである（》Einfältiger Mensch in Mailand《）。》Die Tabaksdose《の冒頭に至っては，この三つすべてが組み合わされて出てくる。

In einer niederländischen *Stadt* in einem *Wirtshaus* waren viele Leute beisammen, die einander einesteils kannten, zum Teil auch nicht. Denn es war ein *Markttag*[22].

都市，市，居酒屋，これがヘーベルの暦ばなしの舞台として特徴的な場である。これらにさらに「戦場」を加えることも可能であろう。ヘーベルには戦争に取材した数多くの暦ばなしがある。ただし，平和主義者のヘーベルにとって戦争はまことに忌わしいもので[23]，》Glück und Unglück《等の少数の例外を除けば，命のやりとりの場としての戦場が直接的な形で物語の舞台となることはあまりない。物語空間としての都市，市，居酒屋には一定の共通項が見出せる。品物，金銭，情報の交換といった目的のために，そこには多数の不特定の人間が出入りする。しかしそれらの人たちのその空間への所属はあくまで仮りのものにすぎない。彼らの本来所属すべき場は別にあるのだ。市には取り引きの行われる日にのみ人々が集まり，居酒屋には仕事の終った後や特別の日だけ人々が集う。周辺地域から多数の非定住者が出入りする都市も，程度の差はあ

20）》Der silberne Löffel《. Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 210.
21）*Ibid.*, S. 117.
22）*Ibid.*, S. 186. イタリック体は引用者。
23）ヘーベルは暦ばなしの中でも，そのような自らの立場を折にふれてしばしば表明している。例えば Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 104.

れ同様の性格を有している。市民という定住者の都市への所属すらもが，それほど明白なことではないのである。市民として75年間パリの外へ一歩も出たことのない老人は，いったん市外に出ることを禁じられるや，矢も楯もたまらずパリを抜け出したくなる（》Ist der Mensch ein wunderliches Geschöpf《）。そこからいつでも自由に出てゆくことができるということが，都市定住の保証になっているかのような具合なのである。そしてそのような場での人間関係も通常の社会でのそれとは随分異なったものになってしまう。「悪銭身につかず正直が一番[24]」と泥棒が泥棒にしたり顔で訓戒をたれたり（》Die Tabaksdose《），「すべての人が互いに顔見知りとは限らないかなり大きな都市[25]」では，新入りの近衛兵がその上官を逮捕してしまうことさえ起ってしまうのだ（》Die Probe《）。

このような空間へのヘーベルの偏愛は，『ラインの家の友の宝石箱』の『序文』の中で，暦ばなしの素材の独自性を否定した個所にも端的に示されている。そこでは，特定の個人の所有に属さない——それゆえ地上の所属関係から切り離された——ことがより明確な空間，「入会地もしくは共同牧草地」（》Allmende oder Gemeinwiese《）に素材の出所がたとえられているのである[26]。

さらに，1813年版暦の家の友の前口上（》Der Huasfreund redet zum dritten Mal den geneigten Leser an und wünscht ihm das neue Jahr《）においては，「大いなる年の市」が世界と人生そのものの比喩として語られている。

> Man achtets just nicht groß, wie immer einer geht und einer kommt, bis man sich zulezt unter ganz andern Leuten befindet als im Anfang. Nicht anderst als auf einem Jahrmarkt; den genzen Tag ist der Platz voll Menschen, absonderlich vor dem Stand des Zweibatzenkrämers oder Bildermanns oder wo der Kalender verkauft wird; aber nachmittags sind wieder ganz andere Leute da als vormittags, und niemand hat gemerkt, daß die ersten fortgegangen und die andern gekommen sind. Also auch auf dem großen Jahrmarkt der Welt und des Lebens[27].

---

24) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 187.
25) *Ibid.*, S. 37.
26) *Schatzkästlein*, S. 13.
27) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 334.

都市，市，居酒屋，この三つがヘーベルの暦ばなしにとって，いかに本質的で重要な場であるかを見てきた。次に登場人物に目を転じてみよう。

Ⅲ

≫Kannitverstan≪ の主人公は「若い職人」(≫Handwerksbursche≪) であった。また彼が物語空間であるアムステムダムにおいて他所(よそ)者であることが短いテクストの中で2度も言及されている。登場人物として「職人」と「他所者」の意味を考えてみることにする。

暦ばなしの登場人物の職業を検討してまず気づくのは，本来暦の重要な読者層であるはずの農夫[28] の姿が奇妙なほど少ないことである。「農作業が話題になることすらない[29]」とするリュップの指摘はもちろん極端すぎる主張であるが（例えば，≫Des Adjunkts Standrede in Gemütsgarten seiner Schwiegermutter≪, ≫Mittel, die Baum- und Rebpfähle dauerhaft zu machen≪ 等），それほどに暦ばなしの全体を通して，本来の農作業に従事している農夫の姿は稀にしか出現しないのである。その数少ない例の一つである ≫Der schwarze Mann in der weißen Wolke≪ における農作業中の農夫は，家の友の仲間によってあろうことか幽霊に見間違われてしまうのである[30]。

農民に代って多数登場するのは，≫Kannitverstan≪ の若者を始めとするさまざまな職人たちであり，商人，兵士，巡礼，さらには乞食，ならずもの，泥棒等である。これらは社会において，農民とはまさに対蹠的な位置にある人々である。農民が農地に拘束されて，いわば土地＝地上 (Erde) に根をおろした生活をしているのに対し，これらの人々は一定の土地に縛られることなく自由に諸国を往来する。技術者であることがまた，彼らの共通点でもある。ヘーベルによれば，泥棒も職人 (Handwerker) に分類されるのである。

> Wenns aber nichts zu stehlen gab, so übten sie [die drei Diebe] sich untereinander mit allerei Aufgaben und Wagstücken, um im *Handwerk* weiterzukommen[31].

28) Rolf Max Kully: *Johann Peter Hebel*, Sammlung Metzler, Stuttgart (Metzler) 1969, S. 54 参照。
29) Lypp, *ibid. Zu J. P. Hebel*, S. 100 より引用。
30) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 74f.
31) ≫Die drei Diebe≪. *Ibid.*, S. 171f. イタリック体は引用者。

たとえ遍歴する職人のように諸国を旅することがなく，一定地域に定住している場合でも，土地=地上 (Erde) に生産の基盤を持たない彼らの生き方の本質に含まれる放浪者性は変わることがない。パリの二人の水汲人夫は，宝くじで同時に10万リーブル以上の賞金を当てる[32]。一人は蓄財に精を出し，やがて「大金持ち」(》ein steinreicher Mann《) となる。今一方はお得意さんを失わないよう3ケ月を限って助手を雇い入れ，その間自分は贅沢三昧の生活をする。予定より早く賞金を蕩尽した彼は，やがてもとの水汲人夫に戻る。そして，「今でも以前と同じように家々に水を運び，以前と同じように満足して愉快にやっている」のである。二人の対照的な生き方に注釈を加えることを，家の友は慎重に控えているが（「家の友はそれに関して思うところがある。だがしかしそれを言うことはしない。」），呵々大笑しているのは，確固とした大金持ちになった前者ではなく，放浪者的生き方を貫いた後者なのである。

旅する人，放浪者へのヘーベルの共感は多くの人が指摘するところである。その中には，すでに述べたように，社会にとって好ましからざるいたずら者や犯罪の職人も含まれている。「高尚といってもいい無能力のために社会に組みこまれることのない，いたずら好きの流れ者への，殆んど共謀者的愛情[33]」によって，暦ばなしにはさまざまな犯罪が描かれることになる。

贋金づくり (》Merkwürdige Gespenstergeschichte《)，合法的密輸 (》Der Handschuhhändler《)，詐欺行為 (》Der Zahnarzt《, 》Der betrogene Krämer《等)，無銭飲食行為 (》Das wohlfeile Mittagessen《) 等々の犯罪もしくは犯罪的行為は，読者の道徳的教化という暦ばなしの目的からすれば不思議なことに，殆んど道徳的非難の対象とはなっていないのである。ヘーベルの暦ばなしの世界では，贋金づくりの犯人を逮捕することより，その犯人との誓約を守ることの方が優先されているのである。このようなヘーベルの傾向をベンヤミンは，ヘーベルの暦ばなしの道徳の座標軸である「ご用心」(》Merke《) と関連づけて次のように述べている。

> 〔...〕 es sieht geradezu aus, als wolle Hebel mit der Sphäre der honorigen Bürgersleute [...] gar nicht länger sich einlassen und schlage sich im Augenblick, wo alles sich um das 》Merke《 dreht,

---

32) 》Der Wasserträger《. Hebel : *Werke 1. Bd.*, S. 53–55.
33) Bloch, S. 144.

auf die Seite der Spitzbuben[34].

ヘーベルの ならずものへの 共感は，ツンデルハイナー，ツンデルフリーダー，赤毛のディーターの『3人の泥棒』(》Drei Diebe《) を主人公とする一連の物語において，その頂点を形成している。そこでは泥棒行為は完全に自己目的に昇華されている。盗んだ豚肉は Dieter に戻され (》Drei Diebe《)，粉ひき屋の馬も持主に返される (》Der Heiner und der Brassenheimer Müller《)。フリーダーにとっては，盗みも一つの「芸」(》Kunst《) なのである。

> [...] der Zundelfrieder stiehlt nie aus Not, oder aus Gewinnsucht, oder aus Liederlichkeit, sondern aus Liebe zur *Kunst* und zur Schärfung des Verstandes[35].

旅する職人を代表的形姿とする非農業民は，本来的に定住する土地を持たぬために，どこへ行っても他所者としての生き方を余儀なくされる。そのような人々と並んで，狭義の異国人もヘーベルの暦ばなしの重要な登場人物である。ユダヤ人を主人公とする数多くの物語や，異国にあるドイツ人を登場人物とする話 (》Die lachenden Jungfrauen《, 》Der Schneider in Pensa《) 等をここでは想起すれば足りるであろう。途上にあることが日常であり，他所者であることが常態である人々，地上にありながらあたかも地上に属さないかのような自由奔放な生き方をしている人々，それらはヘーベルの考える人間本来の姿を，放浪者として他所者としての生き方の中で具現している人々なのである。生とは誕生から死への道程の途上にあることに他ならず，人間の地上への所属もあくまで仮のものに過ぎないのである。ヘーベルの放浪者への深い共感は，そのような彼の現世観に根ざしている。ある手紙の中でヘーベルは，放浪者的なものをたたえ，乞食への羨望を包み隠そうともせず述べている。

> Aber wir gleichen dem wallensteinischen Dragoner: 》auf der Erde hat er kein bleibend Quartier《.
> Es ist gar herrlich, so etwas Vagabundisches in das Leben zu mischen.

---

34) Benjamin: *Gesammelte Schriften III*, S. 205.
35) 》Wie sich der Zundelfrieder hat beritten gemacht《. Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 179. イタリック体は引用者。

Es ist wie der Fluß in dem Tal. Man fühlt doch auch wieder einmal, daß man der Erde nicht angehört und daß man ein freier Mensch ist, wenn man wie der Spatz alle Abende auf einem andern Ast sitzen kann. Das ist es, was den Bettler groß und stolz macht, wenn er sich selbst und seinen Beruf recht versteht. Ich habe diese Glücklichen schon oft beneidet und gebe gerne denen, die es aus Grundsatz sind. Es gibt keine andere Philosophie[36].

また別の手紙では，引越しに伴う転出，転入がこの世からあの世への大いなる引越しの予行演習にたとえられ，この世に永住地を持たぬ人間の運命が語られる。

So lästig das Ziehen ist so gemütlich angenehm und wehmütig wird es mir, wenn ich einen großen Maßstab daran lege und denke, daß wir hier alle nur Quartierträger des großen Hausvaters sind und daß solche Aus- und Einzüge im Kleinen nur Vorübung des Großen und lebhafte Erinnerungen sind, daß wir hier keine bleibende Stätte haben[37].

広義の「職人」や「他所者」が暦ばなしで果している重要な役割は，このようにヘーベル自身の現世観と密接なつながりがある。》Kannitverstan《の主題であった「この世のあらゆるものの移ろいやすさ」の認識も，その同じ現世観に由来するものである。以下において，》Kannitverstan《の主題がヘーベルの暦ばなし全体に対して持つ意味を考えてみることにする。

Ⅳ

この世の移ろいやすさの認識という》Kannitverstan《の主題が，他の物語ではどのように表現されているか見てみることにしよう。

》Unglück der Stadt Leiden《や》Der Brand von Moskau《,》Schreckliche Unglücksfälle in der Schweiz《等の天災人災の報告は，「夜には簡単に早朝

36) An Haufe, Juli 1824. Hebel: *Werke 2. Bd.*, S. 400.
37) An Haufe, 3. Aug. 1822. *Ibid.*, S. 390.

とは様子が一変しうる[38]」ことを示している。人の心の移ろいやすさも見逃されることはない。夫の戦死を悼み，その悲嘆のあまりあやうく死ぬところであった妻は，夫の死体が別の場所に埋葬されると，やがて再婚する。「しかしどんな悲しみも終りなく続くことはない。最も激しい悲しみが最も永続きしない[39]」とヘーベルの透徹した目は付け加えずにはおかないのである。この世の移ろいやすさに抗して節操を守り抜いた話（》Unverhofftes Wiedersehen《）でも，「枯れしぼみ，よぼよぼの老婆の姿のかつての花嫁と，いまだにわかわかしい美しさにある花婿[40]」との対比が読者に強い印象を喚起する。50年の世の移ろいをその身にとどめているのは，死者ではなく，この世に生きている者の方なのである。

しかしながら，この世の移ろいやすさ，はかなさが，このように直接的な形で表わされるのは，ヘーベルの暦ばなしではむしろ稀なケースである。すでに引用した手紙の中でも明らかなように[41]，ヘーベルにとって，死後の永生と比較すればこの世はあくまでも仮のやどりにすぎず，この世のはかなさの認識の背後には揺ぐことのない彼岸信仰がある。ヘーベル自身の母親の姿を彷彿とさせるフランツィスカの母親は，次のように自らの死を告げる。

> Einmal aber früh um zwei Uhr sagte die Mutter: Bete mit mir meine Tochter. Diese Nacht hat für mich keinen Morgen mehr auf *dieser* Welt[42].

この世の終りである死が，あの世での永生の始まりであればこそ，ヘーベルの人物たちはこのように安んじて自らの死を告知することができるのである。しかもこの世のはかなさの認識は，ヘーベルにおいては決して厭世主義と結びつくことはない。》Kannitverstan《の若者は，アムステルダムの体験で，己の運命に満足して生きることを学んだのであった。「ヘーベルの信じる彼岸は，この世とその喜びを取り上げるのではなく，むしろそれらを完成させるのである。[43]」ただ，ヘーベルの絶対的価値基準はあくまでも地上を離れた永遠の生

38) 》Unglück der Stadt Leiden《. Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 103.
39) 》Seltne Liebe《. *Ibid.*, S. 271.
40) *Ibid.*, S. 272.
41) 註35), 36) 参照。
42) 》Franziska《. Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 274. イタリック体は引用者。
43) Theodor Salfinger: Nachwort zu: *Poetische Werke*, S. 795.

の側にあり，決してこの世にはないのである。

このようにして，「地上のあらゆるものの移ろいやすさ」の認識は，別の物語では，地上の価値の徹底的相対化として表現されることになる。

この世の人間関係を決定している諸々の要素——人種，宗教，年齢，社会的地位，財産，名声等々——によって人間の価値が決定されるのではない。》Der fromme Rat《, »Brotlose Kunst《, »Rettung einer Offizierfrau《等におけるカトリック，あるいはユダヤ教を始めとする異教（》Mohammed《や》Der kluge Sultan《の回教，》Der listige Quäker《のクェーカー教等）も，ヘーベルの暦はなしでは，決して排除されるべき対象として登場するのではない。また人名をそのままタイトルとする伝記物語の主人公の殆んどは，ささやかな市井の人たちである（》Franz Ignaz Narocki《, »Veronika Hakmann《等)。逆に，国王，皇帝，将軍といった偉人たちも，歴史の表舞台ではなく，片々たる日常的エピソードを通じて，そのひとととなりが語られる（》Einer oder der andere《のハインリッヒ4世，》Kaiser Napoleon und die Obstfrau in Brienne《のナポレオン皇帝，》Ein gutes Rezept《のヨーゼフ皇帝，》Suwarow《のスワロフ将軍等)。

ヘーベルの世界において，地上の権力がいかに無力であるかは，》König Friedrich und sein Nachbar《が好例を提供している[44]。ここでの粉ひき屋のフリードリッヒ大王に対する昂然たる態度は，ヘーベルの暦ばなしにおける下層民の自由，平等の精神を代表するものである。しかしながら，その精神を政治的視点から解釈するのは誤りである。地上の価値の相対化は，ヘーベルにおいては，地上での平等を目ざす革命精神とは結びつかない。》Kannitverstan《の若者が認識した死による平等（》[...] >was hast du[Kannitverstan] nun vor allem deinem Reichtum? Was ich einst von meiner Armut auch bekomme: ein Totenkleid und ein Leintuch [...]<[45]《）の前では，現世に価値を置くことそのものが無意味なのである。

ヘーベルの自由は地上的なものからの自由であり，その地上的なものとの距離がヘーベルの比類ないユーモアの前提となっている。

> Die Freiheit, die Hebel meint, ist nicht politischer Art; es ist die Freiheit vom Irdischen, das im Vergleich zum Ewigen als unwesent-

44) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 18f.
45) *Ibid.*, S. 53.

lich erkannt wird. Sie ist Voraussetzung für den Humor[46].

そのユーモアは，ヘーベルにとって喫緊の主題ですら相対化してしまう。》Kannitverstan《の若者の認識は，読者の微笑を誘わずにはいないような誤解に基づいていたのだった。

ヘーベルのユーモアの前提である地上的なものからの自由は，作中人物にあってはその置かれている状況からの自由という形を取る。不利な立場にある者や，窮地に迫いこまれた者が，機転を利かせてその立場を逆転するというパターンの話が暦ばなしには数多くある。そのような機転を生み出すことができるのは，自分の置かれている状況を絶対的なものと見ず，そこから自由となって，その状況を相対化しえた者なのである。このようにして，「生まれてからこのかた一度も水に入ったことすらない[47]」男が，水泳の達人に勝ち（》Der große Schwimmer《），フランスの大商人はアルジェリアの海賊船の襲撃から自らの船を守ることができるのである（》Der listige Kaufherr《）。

地上のすべてを相対化するヘーベルの眼差しは，また別の物語では，原因と結果，目的と手段といった置換不可能と考えられているものまで，易々とひっくり返してみせる。》Ein Wort gibt das Andere《で若主人にお家の大事を告げる下男は，原因と結果を完全に顚倒してしまっている。また最初の2週間で歩哨に立つことにあきてしまった新兵は，哨舎が彼のためにあるとは夢々思わず，その哨舎のために彼が立たされているものと思っている（》Der Rekrut《）。あるいは逆に，あくまで論理的であろうとしたために生じた喜劇的状況も語られる。次々と現われた4人の旅人の忠告を首尾一貫して守ろうとしたために，息子と父親はとうとうロバを担いで帰らなければならなくなってしまう（》Seltsamer Spazierritt《）。さらに別の物語では，同一の状況さえ見方を変えれば正反対に解釈されうることが示されている（》Glück und Unglück《や》Verloren oder gefunden《）。

》Kannitverstan《の主題であった「この世のあらゆるものの移ろいやすさ」の認識は，このようにさまざまに姿を変えながらも，彼岸での永遠の生を唯一絶対の価値基準とする現世の徹底的相対化として，ヘーベルの暦ばなし全体の通奏低音となっているのである。そもそも暦そのものが，「ものごとの絶え間

---

46) Däster, S. 122.
47) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 131.

のない大いなる変転[48]」を表現することを宿命づけられた形式ではなかっただろうか。

> In ihm [dem Kalender] läßt man ja mit jedem Umblättern einer Seite gleichsam einen Monat vergehen, und nichts veranschaulicht den Wechsel der Jahre deutlicher, als wenn der alte Kalender durch den neuen abgelöst wird[49].

V

ヘーベルの暦ばなしの世界を，前章までで私なりに通観してきた。

ヘーベルの暦ばなしの世界を貫く根本原理のより明確な把握のためには，社会史の視点の導入が不可欠であろう。あるいはまた，ヘーベルは，その動かしがたい彼岸信仰において，啓蒙主義以前の時代の精神とのつながりを強く感じさせるが，そのことと，啓蒙主義者ヘーベルという従前のヘーベル像との連続性は，どのように考えるべきなのか。いずれも本稿においては検討することができなかった重要な課題である。最後に，神学者ヘーベルと暦ばなしの語り手である家の友との関係について，今一度念押しをしておきたい。

「ヘーベルがためになるおこないをめったに語らず，それに反して，比較にならない位しばしばいたずらを物語る[50]」事情についてはすでに述べた。そのことは，読者の道徳的教化という暦刊行の目的の一つとは背馳するように思われる。事実家の友は暦作者の中で孤立し，読者を甘やかしているとの批判を受ける。

> Alle Kalendermacher werden nach und nach dem Rheinländischen Hausfreund aufsätzig. Denn sie sagen, er verwöhne die Leute und machte sie meisterlos, weil er seinen Lesern über alles, was er tut und unterläßt, Rechenschaft gibt und mit ihnen redet[51].

果してその通りであろうか。『ラインの家の友の宝石箱』の冒頭に置かれた

48) 》Einer Edelfrau schlaflose Nacht《. Hebel : *Werke 1. Bd.*, S. 263.
49) Däster, S. 115.
50) Lypp, *ibid. Zu J. P. Hebel*, S. 99 より引用。
51) 》Des Hausfreunds Vorrede (1819)《. Hebel : *Werke 1. Bd.*, S. 336.

≫Allgemeine Betrachtung über das Weltgebäude≪ の最後には次のように書かれている。

> Also will jetzt der Hausfreund eine Predigt halten, erstlich über die Erde und über die Sonne, zweitens über den Mond, drittens über die Sterne[52].

ヘーベルにとっては暦への寄稿も，説教と同じ宗教家としての営為の一環に他ならなかったのである。いたずら，詐欺，泥棒行為等の数多くの社会道徳に悖る行為を描いていながら，ヘーベルの宗教家としての真正さには疑問の余地がない。すでに述べたように，ヘーベルの流れ者への共感は，彼の揺ぐことのない彼岸信仰に由来するものであった。彼はまた，「私はもはやこの世のものではない」というキリストのことばに深く捉えられていたのである[53]。ヘーベルにとって地上とは，永住を許されぬ異国に他ならず，「大いなる家長」(≫der große Hausvater[54]≪)，即ち神のみもとにある死後の永遠の世界こそが，人間の本来所属すべき故郷なのである。さまざまに形を変えながら，繰り返し読者にそのことへの注意を喚起すること，それ以上に宗教家ヘーベルが果しうる道徳教育があるだろうか。

そして，家の友の中に保持されているこのような宗教家ヘーベルのあり方は，同時にヘーベルの詩人性の，ひいては詩人と名附けられるすべての者のあり方の本質に通じているのではないだろうか。ハイデッガーは詩人の魂をもって書かれたそのヘーベル論において，言われるべきであることを言わないままにしておくという目立たない言い方の中に，読者とって家の友が友である所以を認め，以下のように記している。

> In solchen Sagen findet und behält der Hausfreund eine Zuwendung zum Wohnen der Sterblichen, dadurch er im Haus der Welt einkehrt und dennoch so ihr Gast ist, als sei er es nicht.
> ≫Hausfreund≪——das ist der weit vorausblickende und zugleich verschleiernde Name für das Wesen dessen, den wir sonst einen *Dichter* nennen[55].

52) Hebel: *Werke 1. Bd.*, S. 287.
53) Däster, S. 122 参照。
54) 註37) 参照。
55) Heidegger, *ibid. Zu J. P. Hebel*, S. 46 より引用。イタリック体は原著者。